

【海外留学記】

アメリカで生き抜きたい！

福田 真

アシスタントプロフェッサー 小児栄養研究センター
ベイラー医科大学

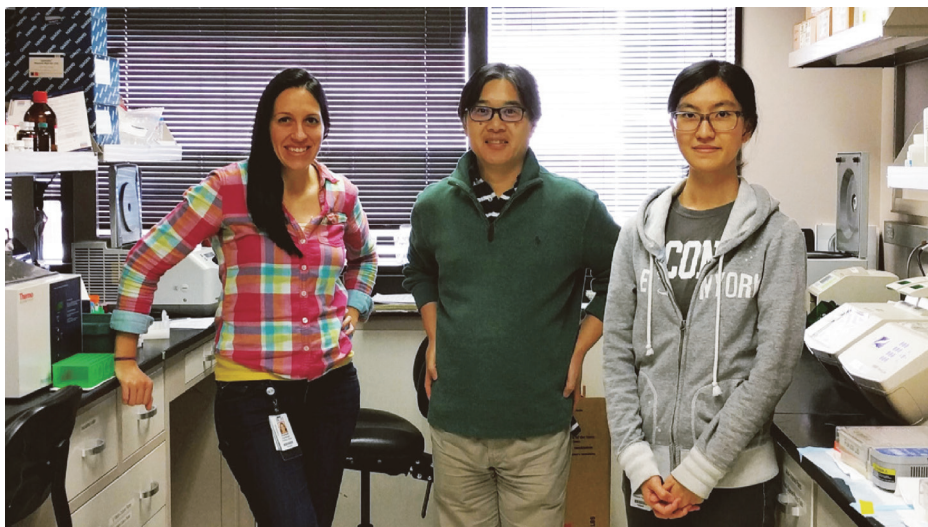
私はテキサス州ヒューストンにあるベイラー医科大学で、肥満糖尿病における脳の役割をさぐる研究をしています。たまたま参加した Cold Spring Harbor Laboratory Meeting 「Mechanisms of Aging」で、思いもかけず留学記執筆の機会を与えていただきました。老化研究の門外漢であるうえに、多くの方が既に留学体験記を書いておられ、何を書けばよいのかと悩みましたが、留学はそれぞれの個人的な体験だと思い直し、アメリカで経験したポストドクサバイバルについて自分なりの考えを書かせていただきます。

もともと日本では、西田栄介先生（京都大学）のもとでシグナル伝達分子の細胞内局在機構から核細胞質間輸送メカニズムと、自分の興味の赴くままに好きなことをさせていただき、細胞生物学のおもしろさを存分に楽しんできました。しかし30代半ばでより高次の生命現象を扱ってみたいと思いたち、Harvard 大学にいた新進気鋭の神経解剖学者であるエルムキスト先生の研究室に飛び込みました。当時、多数の視床下部神経核特異的な遺伝子欠損マウスを作製することで、全身の代謝への脳の役割を調べるプロジェクトが始まっており、私の研究テーマも細胞生物学から生理学へと大きく変わりました。神経科学や代謝学を系統だって学んだことがなく、そのうえ実験手法も不慣れで、まったく戦力になり得ない私でしたが、私をポストドクとして迎えてくれたエルム

キスト先生をはじめいろんな先生方のお陰で、気づいたらアメリカで10年以上研究をしています。未だ模索中の研究生活ですが、これまで気付かされたことが2点あります。

Money talks：論文よりグラントが重視されるということ。エルムキスト先生からも、グラントが取れるような申請書を書ける力があればアメリカで生き残れるとアドバイスを頂きました。日本で論文を一流紙にさえ出していれば全て後からついてくるという風に思っていた私には、この考えに慣れるまで時間がかかりましたが、実際にいわゆる有名雑誌に論文がないので駄目かもしれないと思っていた研究申請書が採択されて驚いたことがありました。さらに、ポストドクからPI (Principle Investigator) に進む際にも、グラントを持っていることで圧倒的に優位になることも目のあたりにしてきました。いわゆるブリッジグラント(ポストドクから次のステップをサポートするNIHや民間財団からのグラント)がとれると、PIになるチャンスも上がるようです。もちろん一流紙に論文を持っている方はグラントやポジションが取りやすいでしょうが、そうでもなくても上手くいくことがあるという点で間口が広いように感じます。ですから、私はラボのポストドクの方にもフェローシップ獲得に挑戦してもらっています。

God helps those who help themselves：自助努力の重



3人の小さなラボですが、脳が全身の代謝を調節するしくみを明らかにしようと奮闘しています。糖尿病や老化を制御する神経経路をみつけて、糖尿病や老化をコントロールすることが夢です。

要さです。エントリーレベルでのアカデミックポジションにいたる道とそれ以後の昇進基準が比較的ハッキリとしていることは、それに向けて自助努力が出来るということでもあります。こちらに来て、自分で積極的に動いて自分の回りの物事を自分でコントロールするポスドクやジュニアPI達を見ました。例えば、与えられたプロジェクトが上手くいかないと嘆くよりはプロジェクトやラボを自分で変える等々。受身で運に左右されるより、目的意識を持ち積極的に動く、そうすると運も寄ってく

るのかもしれませんが。

サイエンスへの情熱、それとともにサバイブする意志と技術があればきっとどこかで研究を続けることが出来ると思います。これまで見たこともないような人物や考え方に出会えるのも海外で研究する醍醐味です。私も未だ発展途上ですが、皆さんも広い世界で思いっきり自分を試してサイエンスを磨いてみるのはいかがでしょうか。